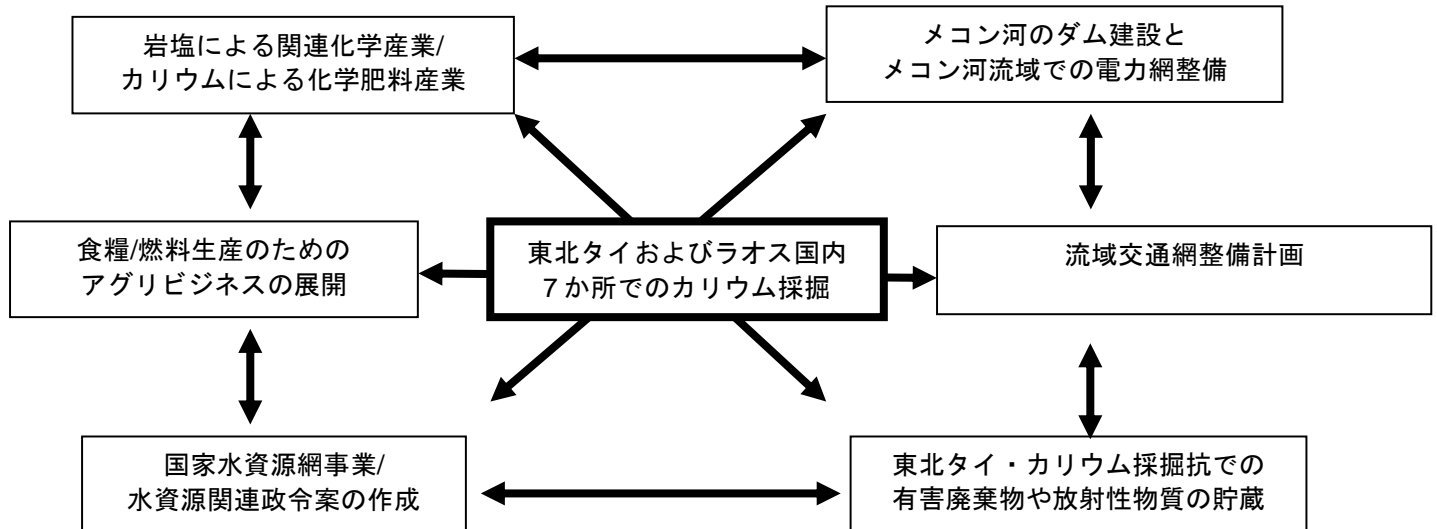


東北タイをメコン河流域の新工業地帯にする開発計画

バンペン・チャイヤラック
生態文化研究会
2010年6月30日

タイの東北地方（イサーン）は水のない暗く渴いた貧困地域と見なされていたが、今日ではその様相が変化してきている。すでに産業界がメコン河流域の近隣諸国と地続きの東北タイに本腰を入れてなだれ込んでおり、様々な協力の枠組みにのっとなって、東北タイをメコン圏内の国々と統合させるべく開発しようと眼差しを送っている。そして、インフラ整備とカリウム採掘を基盤として利用し、東北タイを新しい工業地帯にする準備を整えている。大小さまざまな協力の枠組みの中にある方針をまとめて提示すると、以下の図のようになる。



東北タイ新工業地帯建設概念図

近隣諸国に比べて、今日のタイ経済の規模は巨大で、ビルマ・ラオス・カンボジアの3国を合わせた10倍以上にもなる。このため、タイ経済の動向が近隣諸国に影響を与え、タイは近隣諸国を「経済上の衛星国」と見なし、自身の経済発展を支えるために近隣諸国から安価な原材料・土地・労働力を求めるようになってきている。そして、東北タイを陸の孤島（land-locked country）から近隣諸国と密接な関係を持つ陸の十字路（land-linked country）に変貌させようとしている。これは、東方でムクダハン県の第2友好橋を経てベトナム・ダナン港に達し、西方で東北タイを抜けてビルマ・モールメインで海に抜け、ピサヌローク県でインドシナ十字路を北上すればチェンセン工業団地を通過して中国にまで行きつく東西経済回廊（East-West Economic Corridor=EWEC）の整備に代表されている。

上の図を見ると、カリウム採掘事業に他産業への原材料提供の役目を負わせることで、東北タイを産業社会に変えていこうとする政策が読み取れる。また、現政権の大規模開発政策を検証すると、過去の政権が推し進めてきたメコン河から東北タイへの導水計画を継承していることも見て取れる。

鉱業のための導水と導電

タイ・ラオス2国間で国境を越えて水資源を移動しようとする水資源開発管理協力を詳細に見ると、少なくとも以下の3ルートが検討されている。

- 1) ナムグム - ファイルオン - ランパオ - チー：ナムグムから導水する水の量は約19億7,800万立方メートルで、350万ライ¹以上の農業用地を開墾することができる。
- 2) メコン河 - ルーイ - チー - ムーン - ルート：現在、初期実行可能性を調査中

¹ 訳注：「ライ」はタイの伝統的な土地面積の単位で、1ライは40×40メートルにあたる。

3) ルーイ県パクチョム郡パクチョム（パモンダム）からコンケン県ウボンラット貯水池に至るルート：現在、同じく初期実行可能性を調査中

最近の動きとして、タイ政府は仏歴 2551（西暦 2008）年 7 月 15 日の閣議（コーローモー）で、総額 767 億 6,000 万バーツ²、建設期間 5 年（2552/2009～2556/2013 年）のナムグム - ファイルオン - ラムパオ導水計画の実施を承認し、今後の手続きにしたがって実施を精査するために計画の詳細を内閣に提出した。一方、昨今、ファイルオン地域の住民たちは湿地が冠水する被害や、水位の不自然な変動による漁業への悪影響を被っている。導水地点にあたるポンピサイ郡ではナーガ神の火球³に対する影響も考えられ、コン - チー - ムーン導水計画の問題点である農地への塩害の拡大の傷跡なども残っている。

昨今のメコン河流域開発計画との関係を見ると、国際金融機関や民間企業の投資によってメコン河の下流に 10 ヶ所以上のダムを建設しようとする動きがある。特にタイ・ラオス国境には、ルーイ県のパクチョムダム（パモンダム）とウボンラチャタニ県のバンクムダムといった少なくとも 2 ヶ所で水力発電ダム建設が計画されており、両計画によって、タイ・ラオスの共同水資源管理が経済・投資上の可能性を増大させ、工業化を支えるインフラが整備される。この工業化においては、東北タイ 6 県に 7 ヶ所あるカリウム採掘や岩塩・カリウムを利用した関連事業がとりわけ重要である。

最近、ウドンタニ県では電力網の整備が進んでいるが、ナムグムからウドンタニに高圧送電線を敷設し、この送電線はカリウム採掘現場の変電所にまで伸びている。また、「ラオスのナムグム - ファイルオン - クムパワピー・ハーン湿原 - ラムパオ - ウボンラット - チー川導水計画」は、すでに政府によって推進のための予算が承認されているが、カリウム採掘現場や東北タイ工業地帯にも水を引き、コンケン県のポン川流域工業地帯からもさほど遠くない。

このように、大規模導水事業は、東北タイに年間を通して農業のできる緑の大地をもたらすのではなく、東北タイを国内の新工業地帯にするための道を開くインフラ整備の施策なのである。

東北タイ工業化への道

東北タイの地下には、少なくとも 18 兆トンの岩塩と膨大なカリウムが眠っており、その価値は計り知れない。このため、政府と民間は、東北タイの地下のカリウムを採掘したいと考えており、資源の量・質ともにタイが世界の岩塩・カリウム市場を席卷するのに十分である。というのも、岩塩は肉を塩漬けにするなどそのまま食品産業に使えるし、カリウムも化学肥料の原料になるばかりか、両者とも化学/石油化学産業の原材料としていくらかでも使い道がある。このため、タイ政府は「**鉱業および関連産業戦略**」と呼ばれるマスタープランを策定し、カリウム・岩塩採掘から肥料や化学製品産業をまとめることで、川上・川中・川下産業を連結しようとしている。そして、少なくとも 6 県で 7 ヶ所⁴のカリウム採掘事業を推進しようとしている（ラオスでも現在 2 ヶ所で実施中である）。これにより、東北タイをアジアにおける肥料と岩塩の生産・集積拠点とし、カリウム採掘の副産物である塩をさまざまな産業で活用できるようにしようとしている。

（原文タイ語 日本語訳：土井利幸／メコン・ウォッチ）

² 訳注：約 2,300 億円

³ 訳注：仏教徒の四旬節が終わる頃（陰暦 11 月の満月の日）、メコン河の中央から赤い火球が 20 メートルほど打ち上がる現象が見られる。巨大な蛇の姿をしてメコン河に住むナーガ神が四旬節の終わりを祝って火球を打ち上げると信じられている。

⁴ 東北タイのカリウム採掘計画には、イタリアンタイ社系列のアジアパシフィックポタッシュ・コーポレーション社による事業（ウドンタニ県）、東南アジア諸国連合（ASEAN）の ASEAN カリウム採掘社によるバムネットナロン・カリウム採掘事業（チャイヤブーン県）、中国系のタイ・チャイナミンターポタッシュ・コーポレーション社による事業（サコンナコン県）、タイホールディング社とタナストン（1997）社による事業（ナコンラシャシマ一県）、バンコク土木産業社による事業（コンケン県）、タイサラカムアグロ・ポタッシュ社による事業（マハサラカム県）がある。